

Case9 左顔面神経麻痺

1才 女児

<主訴> 泣くと口元がおかしい

<現病歴> 平成11年2月23日39℃の発熱があったが、翌日には解熱した。2月25日より泣いた時に口元がおかしいのに気づいた。2月26日左の口元からよだれを垂らすようになったため、当院救急外来を受診した。

<入院時現症> 機嫌よし。啼泣時左眼の閉眼障害を認め、左口角が下垂していた。口腔内異常なし、胸部異常なし。腹部に明らかな腫瘍を認めない。皮膚には出血斑および皮下出血を認めない。

<検査> 血液検査では白血球の増多[WBC14900/ μ l (seg.9%, lym.83%, aty-lym.5%, mono.3%, blast.0%)]、CRPの軽度上昇(0.6mg/dl)を認めた。末梢血中に未分化細胞を認めず。Hgb12.9g/dl、Plt28.3万/ μ l。LDHは258IU/lと正常範囲内であった。頭部CT・腹部エコーで腫瘍病変を認めなかった。

<家族への説明> 臨床所見より左側顔面神経麻痺と診断した。家族には顔面神経麻痺はウイルス感染後に起こる場合と白血病細胞などの腫瘍細胞の浸潤によって起こる場合があるが、検査結果より後者は否定的であること、顔面神経麻痺は1~2週の経過で麻痺が軽快するのがほとんどであることを説明し理解いただいた。

<経過> 入院後左の角膜の乾燥予防のため眼軟こうを用いながら様子を見ていたところ、3月3日(第6病日)には啼泣時に左眼の閉眼を認めたため、3月5日軽快退院とした。

退院後1週間後の外来受診時には、口角の偏位もなく、啼泣時に両眼の閉眼を認めたため、外来受診を終了とした。